

図書館だより



No. 3

平成30年6月11日発行



「今年の梅雨は早く始まって、早く終わる」と気象予報士さんが話していましたが、南から続々と平年より早くに梅雨入りし、関東地方もとうとう先週、梅雨入りが発表されました。みなさんは雨の降る休日をどんな風に過ごしていますか。雨にも負けず、外出を楽しむ人もいるでしょうが、他の季節に比べて室内で過ごす時間が増える人も多いと思います。音楽を聴いたり、映画を観たり、ハンドメイドで小物を作ったりするのも充実した時間の過ごし方ですし、雨音を聞きながらの読書も趣があつてよいものです。いつもの読書とはちょっと雰囲気を変えて、雨をキーワードに読む本を探すのも楽しそうですね。私が今、パッと思い浮かべたのは、『死神の精度』(913.6-I 伊坂幸太郎 || 著 文藝春秋)、『いま、会いにゆきます』(913.6-I 市川拓司 || 著 小学館)、『おじさんのかさ』(E-サ 佐野洋子 || 作・絵 講談社)でしたが、きっとまだまだあるはず。みなさんも図書館で色々探してみてください。

クラシックの名曲に出会う

760-7 『この名曲が凄すぎる』 百田 尚樹 || 著 PHP研究所

『永遠の0(ゼロ)』や『海賊と呼ばれた男』などの著者でもある百田尚樹さんは、実は筋金入りのクラシック好き。その百田さんが「凄い！」と絶賛する24曲について、熱く語られています。『まさに音楽がもう一人の主人公であるかのような効果を発揮していた』(ジョンプリン「ラグタイム」)、『とてつもないドラマの始まりと悲劇を予言し、同時に希望と奇跡を暗示している』(バッハ「マタイ受難曲」)など、言葉の端々から百田さんの溢れる想いが伝わってきて、1曲1曲に興味湧きます。CD付き(貸出しています)なので、百田さんの言葉に併せて、実際の音を聴いて曲を味わってみてください。

ふたりきりの親子の切なくも深い絆

913.6-1 『雨と夢のあとに』 柳 美里 || 著 角川書店

桜井雨は12歳、写真家の父と二人暮らし。雨という名前は、大好きな父がつけてくれた。父は仕事で海外へ出かけることも多い。留守番には慣れているけど、家に一人でいるのはやっぱり寂しい。しかも、今回は蝶を撮りに行ったまま、連絡もよこさず、なかなか帰ってこない。ようやく「ごめんごめん」と帰ってきた父は、いつもと変わらない父なのに、どこかおかしい。気配もなく近くにいたり、急に姿を消したり…。雨が感じるこの不穏な違和感は、一体何なのか。それが明らかになってしまふことを雨は怖いと感じるが、霧が晴れてくるように、少しずつ真実が見えてきてしまう。

雨を描いた名画に出会う

雨の日が続くと、なんとなく憂鬱な気持ちになってしまいます。そんな時は雨を描いた名画を鑑賞して気持ちを変えてみませんか。

今、館内では、美術科 結城先生に雨を描いた名画を教えていただき、画集や書籍を展示しています。それが右の一覧ですが、みなさんの知っている絵はあるでしょうか。絵から感じられる雨の音、雨のにおい、雨の日の空気からは、普段、体感している雨とは異なった風情が味わえます。

雨の日には、図書館の展示に足を運んで、「雨もいいものだ」と思える名画と出会い、ゆったりと優雅なひとときを過ごしていきましょう。

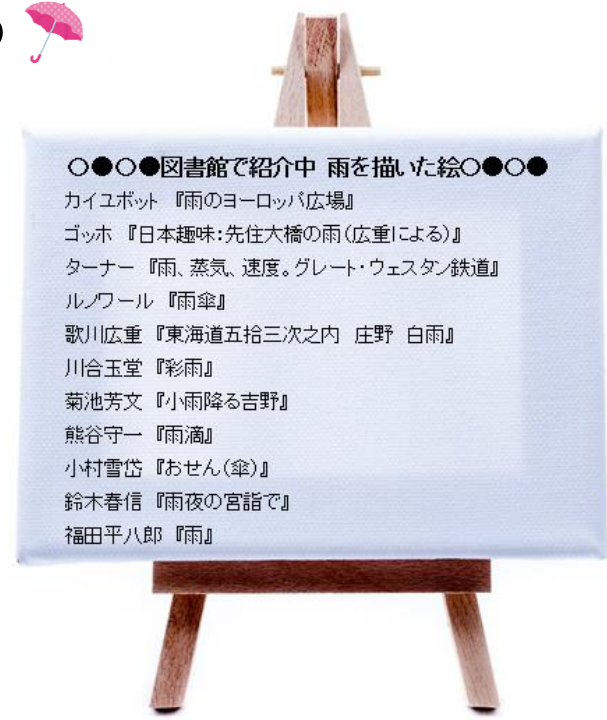
721-3 『意匠の天才 小村雪岱』 新潮社

小村雪岱^{せつたい}は大正～明治初期にかけて日本画、装幀、挿絵、舞台美術と様々な分野で活躍した人物です。出身はなんと川崎市。上記で紹介した『おせん(傘)』は、新聞小説『おせん』の挿絵を描きあらためたものです。画面いっぱい描かれたたくさんの傘、その隙間から覗くおせんの姿。解説で「完璧な構図」と称賛されている理由が素人ながらわかる気がします。他の作品を見る上でも構図は注目すべきところ。センスのよさが遺憾なく発揮されている作品の数々をお楽しみあれ。

図書館司書の「今月はこの本を読みました」

ビートたけしさんがノーベル文学賞を狙っていると、聞きました。映画監督 北野武としても国内外で活躍されていますが、「次の目標はノーベル文学賞か！」と興味を持ち、『アナログ』(913.6-ビ ビートたけし || 著 新潮社)を読みました。

デザイン会社に勤める悟は、喫茶店で出会ったみゆきに一目惚れます。ふたりはあえて連絡先は交換せずに、また木曜日ここで会いましょう、三週連続で会えなかった時は縁がなかったと思ひましょう、と約束をする。携帯電話やスマートフォンを使えば簡単にやりとりができる今、あえてアナログに距離を縮めていくふたりのやりとりは、なんだかとても楽しそうです。だけど、運命はある日を境に思わぬ方向に進んでいきます。たけしさんの書くものって、アクが強そうだな～と勝手な想像をしていましたが、イメージがくつがえるくらい『アナログ』は正統派な純愛小説で、スーッと心に入ってきました。



- 図書館で紹介中 雨を描いた絵○●○●
- カイユボット 『雨のヨーロッパ広場』
 - ゴッホ 『日本趣味:先住大橋の雨(広重による)』
 - ターナー 『雨、蒸気、速度。グレート・ウェスタン鉄道』
 - ルノワール 『雨傘』
 - 歌川広重 『東海道五拾三次之内 庄野 白雨』
 - 川合玉堂 『彩雨』
 - 菊池芳文 『小雨降る吉野』
 - 熊谷守一 『雨滴』
 - 小村雪岱 『おせん(傘)』
 - 鈴木春信 『雨夜の宮詣で』
 - 福田平八郎 『雨』

そっだ、先生と本のことを熱く語ろう!! ~原口先生編~

司書(以下 司):原口先生は図書館に『ハックルベリー・フィンの冒けん』が入った時にすごく喜んでくれましたが、ああいう冒険ものをよく読むんですか。

ハックの相方トム・ソーヤの『トム・ソーヤの冒険』や『ロビンソン・クルーソー』とか。

原口先生(以下 原):そういうわけではないですね。大学でアメリカ文学のゼミに入っていて、そこでマーク・トウェインを好きになって読みました。もともとシェイクスピアがやりたくて大学に入ったんですけど、勉強していたらアメリカの方がおもしろそうだなと思い始めて。

司:シェイクスピア好きなんですね

原:シェイクスピアも好きですね。舞台を観にイギリス・ロンドンにも行きました。

司:一番好きなのはなんですか

原:うーん何だろうな…(しばし考え込む原口先生)

アテネのタイモンがおもしろかったって記憶がありますね。

司:あ!私、舞台を観に行きました。未完成って説もある作品ですよ。タイモンがひたすらかわいそうだった。

原:悲劇か、喜劇か、って言われている作品ですね。他にも『終わりよければ全てよし』とかもそうですし、その辺はひと通り読んだかな。

司:『アテネのタイモン』という予想外な作品の名前が挙がって驚きました。

原:『ロミオとジュリエット』だけじゃファンとは言えませんからね(笑)

司:あとは原口先生といえば、遠藤周作が好き、ってイメージが私の中では強いです。

原:一番好きですね。浪人の時の予備校の先生が紹介してくれたのが読み始めたきっかけです。初めに読んだのは、『私が棄てた女』でした。そこから、『侍』や『深い河』を読みました。

司:『深い河』はあのラストにびっくりしますよね。私、「えっ?」って声が出てしまいました。

原:結末でグッとくる作品が多いですね。考えさせられるというか、人の心に訴えかけるというか。『侍』もすごくおもしろいですよ。国のお使いで海外に行くんですけど、うまくいかない。その旅の途中でキリスト教に出会います。始めは「なんだそりゃ」と思っているキリスト教が心に根付き、イエスの弱さと自分の弱さを重ねて考えたりしていく中で、人間の心には弱さがあって、何かひとつ自分を裏切らない存在というものを求める心があるのだと悟ります。

司:以前、遠藤周作を読んで行ってみたい秘境があるって言っていましたよね。

原:そっだ!その話をしましょう。そもそも遠藤周作という人間は、日本的な美しさとか良さを僕達に気づかせてくれると思うんです。彼の本を読んだ後に、例えば長崎に行って教会を見て回ったりすると、見えてくる景色が全然違ってきますよ。文学的な深みが出てくるんです。

その中で遠藤先生が日本にある最高の景色はここだ!と言っている場所があるんです。作中にはそこがどこなのかは書いていないんですが、僕はそれがどこなのか大体的見当がつかしました。でも、ここでは教えま

ゆるっと
933-ト 『ハックルベリー・フィンの冒けん』
マーク・トウェイン || 著 研究社

932-シ 『アテネのタイモン』
シェイクスピア || 著 筑摩書房

913.6-I 『深い河』
遠藤周作 || 著 講談社
913.6-I 『侍』
遠藤周作 || 著

913.6-I 『ピアノ協奏曲二十一番』
遠藤周作 || 著 文藝春秋

せん。気になったら、聞きにきてください。

あとは『ピアノ協奏曲二十一番』という本の中に入っている『箱』もいいですよ。すごく好き。

司:『箱』の何がそこまで原口先生の心を掴んだんですか。

原:たまたま立ち寄った骨董品屋さんで、たまたま手に取った箱の中に、自分にしかそのものが持つ意味がわからないであろうものが入っていたという運命的な何かを感じる話なのですが、こういう本を読むことによって、運命とか共時性(シンクロシティ)いうものを信じるようになりました。

あとは、人の弱さとか、偶然の一致とか、宗教的感受性とか、そういったものを僕は遠藤先生から教わりましたね。入信しろという意味でなく、宗教的感受性は特に高校生のみんなにも持ってほしいです。海外に出ると、日本人って絶対に宗教というものとぶつかるんですよ。どういう考えと衝突して、悩んだ末に、どういう行動をとるべきなのかということを経験した作品から学んだし、自分が海外に行くようになってから、あの時のあの登場人物の気持ちってこういうことだったのかなと思いを馳せることもできました。グローバルに生きるために真に必要な要素ですね。

司:原口先生、かっこいいですね。遠藤周作への思いがすごく伝わってきました。

その他には最近、何を読んでいますか。

原:最近の内村鑑三の『余はいかにしてキリスト信徒になりしか』とか福沢諭吉の『学問ノススメ』を読みましたね。福沢諭吉おもしろいですよ。おすすめ。

司:福沢諭吉のおもしろさが高校生にもよく伝わるのはどれでしょう。

原:『福翁自伝』です。幼少期のやんちゃっぷりがおもしろいです。

司:日記とかエッセイを読んで、その人がどんなことを考えて暮らしているのかっていうところに触れた時に意外性があったり、自分と似たところを見つけたりして、親近感を抱くことができますよね。その後その人の書く小説を読むと、おもしろい。

原:日記特集、図書館でやりましょう(笑)!!マーク・トウェインの日記『ヨーロッパ放浪記』もおもしろいですよ。

司:そこでもやっぱり日記を読んでいるんですね。

原:マーク・トウェインはね、ディズニーランドにもマーク・トウェイン号って蒸気船があるくらいアメリカでは超有名な人ですからね。知らない人はいません。

司:トムソーヤ島もありますもんね。そうか、私はこれからディズニーランドへ行ったら、マーク・トウェイン号に乗ったり、トムソーヤ島に行ったりしながら、ハックルベリーやトム・ソーヤのことを思い浮かべればいいのか。

原:そうそう、そして、あそこに流れる川をミシシッピ川だと思えばいいんですよ。

司:それは楽しい想像ですね。この本を読むきっかけくれた原口先生に私は「ありがとう」を伝えたいです。

原:だからこれもね、共時性ですよ。

『ハックルベリー・フィンの冒けん』が入ってきた時にたまたま僕がぶらりと図書館へやってきた、その共時性。『箱』と一緒に。繋がっているんです(笑)

司:日常の中にあるこういう偶然を遠藤先生は言っているんですね。

原:そう、改めて気づかされましたね、この対話によって(笑)

司:最後にいい終わり方でまとまりましたね(笑)!!ありがとうございました。

289.1-7 『福翁自伝』
福沢諭吉 || 著 岩波書店